

口腔の発達とその診断

田村康夫

朝日大学歯学部小児歯科学講座

小児の咀嚼機能は出生後から乳歯萌出開始期、乳歯列期、混合歯列期、永久歯列期へと著しく変化し、しかもこれらの変化は骨・歯・神経-筋の三系がお互いに影響し合い、またバランスをとりながら成長していく。咬合についてみると、小児は咬合の変化に対する順応性は成人に比べて優れ、それが例え不正な咬合であっても順応できることが知られている。しかし忘れてならないのはこの場合小児が自覚症状を訴えないだけで、成長段階において形態の変化と同時に病的な機能的順応も進行しているということである。それ故、小児の咬合を診る場合、将来の健康な口腔を育てる意味でもこれらの点を考慮しながら診査していく必要がある。しかし成人においては既に種々の機能検査機器が適用され、検査結果が診査診断に用いられているにもかかわらず、小児を対象とした診査は模型あるいはセファロ分析による歯列、咬合や顎顔面のいわゆる形態的分析が中心で機能検査はあまり行なわれていないのが現状である。この原因としては小児の成長段階による口腔機能の生理的変化あるいは病的変化があまり明らかにされていなかったことが挙げられよう。この点に関し、最近の小児の口腔機能の発達に関する研究は量的質的にめざましく、次第に小児の機能的な特徴も明らかにされつつあり、また口腔機能に関する診査と診断方法が小児歯科臨床にもようやく導入されるようになってきている。

以上の観点から各種機能検査機器を用いた小児の口腔機能の発達の評価と臨床の場における機能的診査法について紹介し、また将来的展望についてもふれてみたい。